

# 極楽寺だより



2015(平成27)年11月号

発行所：極楽寺 (浄土真宗本願寺派) ☎759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

## 秋の永代経法要のご案内

次の通りお勤めいたしますので、お誘いあわせの上、お参り下さいますようお願いいたします。

十一月十一日(水)

昼一時半 夜七時半

十一月十二日(木)

昼一時半

講師 福岡市 西教寺住職

森 哲人 師

昼間お仕事の方は、ぜひ夜席にお参り下さい。

## 永代経法要とは

住職が子ども頃は、

山を走り回って遊んでいました。しかし、今は大人でもなかなか入ることができません。なぜなら、山に入る人がいなくなったことで、道がなくなってしまうからです。先に行く人が踏みしめる歩みによって、道はできるので。私たちのところはまだ、お念仏の教えが伝わってきたのも、先だつてこの道を歩まれたご先祖があるから、志を納めお寺を護つてこられた先輩方がいるからなのです。そして次に歩む者がなければ、道は途絶えてしまいます。永代経法要とは、永代にわたって伝えられたこのみ教えを感謝と共にいただき、永代にわたり伝えていこうと

## ご予約下さい

- ◇12月18日14時 仏婦報恩講
- ◇12月31日夜23時45分 除夜の鐘撞き
- ◇1月1日10時 元旦会
- ◇1月14~16日 御正忌報恩講

# お取越しの季節です

お寺にご連絡下さい。  
日程を調整した上で、  
お参りにうかがいます。



「お取越し」とは、真宗寺院において最も大切な行事である親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりも取越し（早めて）、各家々で勤めるという門徒にとって大切な伝統行事です。ところが近頃は、「どうして親戚でもない人の法事を、勤めなくてはならないのか！」と怒られそうな時代になりました。しかし、親鸞聖人が亡くなられてから約七五十年。長い歴史を通して「伝えなくてはならない心がある」と、私たちのご先祖や先輩方が「お取越し」という行事を、私たちのところにまで届けて下さっているのです。

さて、気がつけば十一月を迎え、今年も終わろうとしています。毎年、「今年こそ、あれをしよう」「これをしよう」と目標を立てるのですが、一年通して続くことがほとんどありません。特に腰痛持ちですから、「エアロバイクをしよう!」「TRFのダンスエクササイズをしよう!」と、運動不足解消とダイエットに努めるのですが、続くのは少しの間だけ。日々の忙しさに流されて、いや忙しさを理由にして不健康な生活を続けています。

自堕落な営みを繰り返している私ですが、先日耳の痛い話を聞きました。これは、昔からお説教でよくお話

されるのだそうですが、インドの雪山に寒苦鳥という鳥が住んでいるというのです。この山は、夜の寒さがすさまじく草木も凍るほどですが、昼になると陽の光が照らし暖かくなります。寒苦鳥は、夜になると「ああ寒い、ああ寒い」と鳴き、毎晩「夜が明けたらこの寒さに耐えられるよう巣を作ろう」と思うのですが、昼になって暖かくなるとすっかり忘れてしまい、とうとう巣を作ることなく死んでしまうのだとか。

まさしく、私自身の有り様だと思わされたのですが、このお話が伝えるのは運動不足やダイエットだけではなく、私の生き方そのもの、どこへ向かって生きているのか、何を大切にしているかを粗末にしながら生きているのか、そのことを深く考えない生き方を厳しく指摘しているように思えたのです。

人生において、健康は大切です。お金も重要だし、楽しみも欠かせません。しかし、人間として「どう生きるべきか」「どこに向かつて生きるのか」ということも、とても大切なことです。健康、お金、楽しみだけの人生ならば、それを失った時に「病気になったら、ダメだ」「歳をとったら、つまらない」「お金がなかったら・・・」と、自分の人生を貶めることにもなりかねないのですから。

私たちは、大切な人の病気や死、苦しみ、悩みを通して

様々なことを考えさせられます。しかし近頃は、誤魔化したり、忘れさせたりする道具や言い訳が氾濫していますから、真剣に向き合うこともせず、面白おかしく人生を過ごせばいいという傾向が、広がってはいないでしょうか。TVやゲーム、ネットやスマホで、いくらでも暇をつぶすことができますが、人生そのものが暇つぶしに終わるようであれば、これほど虚しいことはありません。

私たちの先輩方は、親鸞聖人の生き様を通して「どう生きるべきか」「どこに向かって生きるのか」を深く見詰め、聖人の後ろ姿に導かれ、苦しみや悲しみの人生を心豊かに歩まれました。

しかしその時は真剣でも、またすぐに忘れがちである自分の生き方をも見詰め、お寺を建て、お仏壇や様々な行事を用意し、常に仏法のそばにこの身を置ける環境を用意されたのです。ただ、お葬式や法事、お盆は、亡き人やご先祖を中心にしがちになります。だからこそ、この私の生き様を中心に深く味わう場として、この「お取越し」という行事が大切にされたのでしよう。

こんな時代だからこそ「お取越し」の存在は、ますます重要になってきていると思うのです。 ■



二条窪でのシーン

『花燃ゆ』第39回(9月25日放送)から、三隅二条窪が舞台となりました。この回の後に放送された「花燃ゆ紀行」で、長門市が紹介されましたが、残念ながら極楽寺は放送されず。幕末を描くドラマですから登

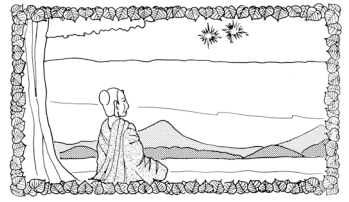
場人物が多く、寿さんの存在感は薄いままでしたから、極楽寺との関わりまでは紹介しきれないのも仕方がないことかもしれません。

ドラマでは、元奇兵隊士・中原復亮(演じるのは、若手イケメン俳優の堀井新太さん)が登場します。中原復亮は、三隅名誉町民の一人、山口県初の女医で地域医療に尽くされた中原篷のお父さんです。住職が実行委員で携わっている、村田清風記念館の『楯取素彦と妻・寿展』では、現在復亮に関する展示(奇兵隊隊長旗や、小倉城主の兜など)をおこなっています。こちらも、よろしく願います。 ■

大河ドラマ  
花燃ゆ  
NEWS



中原復亮役の堀井新太さん



## 極楽寺揭示伝道 けいじてんどう

のん気と見える人々も  
心の底をたたいてみると  
どこか悲しい  
音がする

夏目漱石

## 11月の言葉

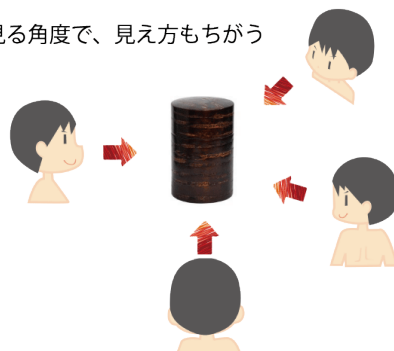
葬儀そうぎに行きますと、様々な悲しみと出遇であいます。しかし、中には気丈きじょうにふるまう人もあり、明るくふるまう人もあります。ところが先日、ご主人の七回忌を済ませられた方から、「主人の葬儀から三年間の記憶が、あまりないのです。」と言われたのです。周りからは、しっかりしておられると感心かんしんされ、元気に見えたその方も、実は深い悲しみの中にあつたのでした。人は、外からでは見えないものを抱かかえながら、生きているのだと教えられ、私がいかに薄っぺらくものを考えていたかと深く反省させられました。

目には見えなくても、誰もが悲しみ、悩み、苦しみを抱えながら生きています。それを呑み込んで生きる人を、「のん気」だと笑う人こそが、実は「のん気」な生き方をしているのかもしれない。私たちが見ているのは、その人の一部でしかないことを、忘れてはならないでしょう。

仏道修行の根本は、正見しょうけん（正しくものを見る）です。ここでの「正しさ」とは偏らないということであり、つまりは「ありのままに見

る」ということです。しかし、私たちは「ありのままに見る」ことはできません。茶筒も、真横から見れば長方形に見えますし、真上から見れば丸に見えます。斜めから見たとしても、内側は見えません。テレビの映像も同様に、ある角度から切り取った一部にしか過ぎないのです。それは時には、視聴率をあげるために、面白く、わかりやすいようにという意図的に切り取られている場合もあります。時には政治的な意図が入り込む場合もあるでしょう。そこには切り捨てられた景色もあるはずなのですが、私たちにはそれを見ることはできません。

見る角度で、見え方もちがう



だからといって開き直って、一部ですべてを判断することは危険です。自分に置き換えてみても、一部だけで全人格を決めつけられることほど、嫌なことはありません。だからこそ、今見ている景色は一部でしかないことを自覚する。角度を変え、立場を変えて物事を考える。目には見えない部分を想像していくことが大切なのです。

「大切なのは、世界は多面体であるということ。とても複雑であるということ。そんなに簡単に簡単に伝えられないものであるということ。」

でもだからこそ、豊かなのだということだ。」

(『世界を信じるためのメソッド』森達也)

そんな営みこそが、人生を心豊かに耕す。

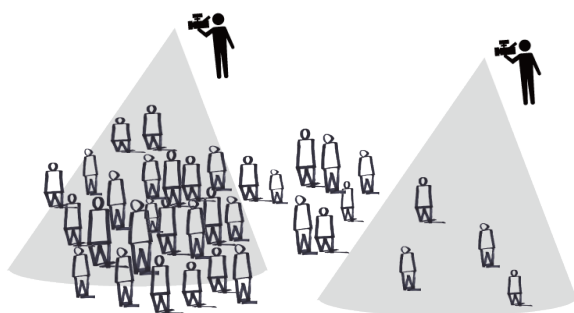
していくのではないかと教えられるので

す。



## 10月の言葉

どこを切り取るかで、景色が変わる



すると、一人の子が言ったのです。「掘ったら、見えるよ。」と。いや、凄いいことを言ってくれどと驚きました。うれしくなり、私はこう言ったのです。

「そうだね。掘ったら見えるよね。実はね、

私たちにも根っこがあるんです。根っこがあるから、生きていける。育てられる。でも、その根っこは目には見えません。どうしたら見えると思う？それはね、掘ったら見えるんです。では、どこを掘ればいでしょう？それは・・・、心です。心を掘ったら見えるんです。」

私たちは目には見えないけれども、いろんな関わりの中で支えられ、生かされています。仏教ではそれを縁起と言います。しかし、現代社会に生きる私たちは、それを薄っぺらにしか受け止めることができなくなり、心を掘り下げることがなく、自分の根っこを見失うような生き方をしてはいないでしょうか。

今の時代はお金さえ出せば、いろんなサービスを受けられるようになり、自分一人でも生きていけると勘違いする人が出てくる時代となりました。第一、このシステムも私が作ったものではありません。いろんな歴史の中で、いろんなはたらきの中で、ようやく私たちが恩恵



以前、お寺の子ども会で、こんな話をしました。まず、木の絵を描きます。「木が樹っています。木には根っこがあるよね。根っこがなくなったら、どうなる？」

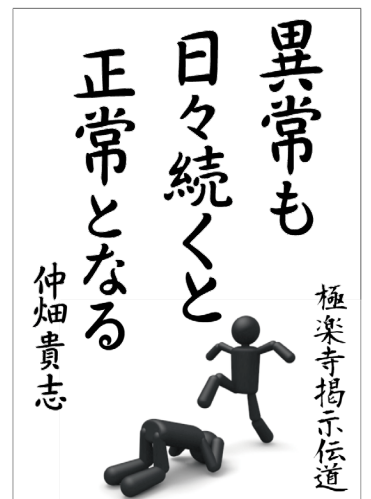
「倒れる」「木が枯れる」と、子どもたちは言いました。

「そうだね。倒れるね。枯れるよね。根っこがあるから、木は育ち、樹っているのです。でも、根っこは目には見えません。」

を受けることができたものなのです。そんなことは、少し深く考えれば、誰でもわかりそうなものですが、目先の損得ばかりを追いかける薄っぺらい時代では、なかなか見えづらくなっているということなのでしょう。か。つ

「お陰さま」とは、目には見えない部分である「陰」に、わざわざ丁寧に「お」と「さま」をつけた言葉です。私たちの先輩方は、心を深く掘り下げること、目には見えないけれどもこの私を支え、生かし、育てて下さる根っこの世界と出遇い、「お陰さま」と大切にされたのです。それは同時に、心を耕し、心を豊かにする営みでもありました。

中でも親鸞聖人は、より深く心を掘り下げていかれる中で、この私のいのちそのままが底の底から阿弥陀様に支えられてあったという豊穡な世界と出遇われたのです。その阿弥陀様のはたらきを、本願他力というのです。■



## 9月の言葉

『YOUは何しに日本へ』というTV番組があります。空港で、日本にやって来たばかりの外国人に声をかけ「何を目的に来たのか」「何に興味があるのか」を聞き、同行取材していく番組です。日本の魅力に驚き興奮する外国の人たちから、私たちが当たり前のようにして見落としている日本文化の素晴らしさを、改めて教えられます。極楽寺も昨年、台湾から大学生をホームステイで引き受けました。地元を案内していると、「ビューティフル！」と喜び興奮したのが日本家屋です。私たちからすれば、どこにでもある当たり前の風景に感動していたのが印象に残りました。やはり、外からの目は大切ですね。内側にいるからこそ見えないことがあり、素晴らしさに気づけな

いものがある。それを外からの目によって気づかされなかつたら、私たちは大切なものを粗末にし、安易に捨ててしまうのでしょうか。

これは、例えばいじめの問題にも通じます。学校という閉ざされた空間の中で、いつしか「あいつは虐



めても構わない」という空気が熟成され、異常が当たり前となり正常へと変わっていく。内側にいることで、異常に気づけなくなる。外からの目というものがなければ、私たちは空気に流され、大切なものを根こそぎ踏みじめることもありすから、どこからの目を意識するのが重要なのですが。

さて、今月の言葉はコピーライターの仲畑貴志氏が、映画『戦場のメリークリスマス』(大島渚監督1983年公開)の宣伝用に作られたコピー史に残る傑作です。この映画は、若かりしビートたけし(今や世界的な映画監督になりました)や坂本龍一(この方も、世界的な音楽家となりました)、そしてかのデビット・ボウイが出演する名作。今観ても、たけし氏の存在感は圧倒的です。太平洋戦争中の日本軍捕虜収容所での異常な状況を、正常として過ごす人々が描かれます。戦争とは、閉ざされた空間や価値観の中で、まさしく異常な日々を正常に変えてしまいい、その異常さに気づけなくさせるのでしよう。そんな中に生まれる日本兵と捕虜の心の触れ合いが描かれるのですが、閉ざされた空間ではそれが罪となり、異常な行動とされるのです。あまりにも有名なラストシーン、



## Merry Christmas Mr. Lawrence

ハラ軍曹(たけし)の「メリークリスマス! ミスターローレンス!」という叫びは、そんな触れ合いこそが人間として正常な行いなのだという思いが込められているように聞こえました。

現在公開中の映画『野火』も、まさしく異常が正常となる狂気を教えてくれる映画です。大岡昇平原作の小説を、塚本晋也監督・主演によって作られたこの映画。長年、撮りたいと念願していた塚本監督は、せめて話だけでも聞かなくてはと戦場に行かれた人たちのインタビューを始めます。そして、実際に戦場の痛みを知る人が少なくなり、また現在の時代状況を鑑みて、「今撮らなければ、もう撮ることができなくなる」と資金をかき集め、自主映画という形で実現させました。いやはや、凄い映画です。

名匠市川崑監督も映画化しており(1959年公開)、これもまた素晴らしい作品なのですが、塚本作品の方がジメジメ感や不快感が高く、最下層の兵士が巻き込まれる戦争の悲惨さ、そして人間の醜さがより伝わるように私は感じました。そこには、大義名分や美しさなど一欠けらもありません。ただ、極限の人間の生き様があるのみ。私たちの目から見た異常な状況が、あの地では日常になっていたのでしょうか。

オシエノカケラ「毎日お参りしましょうキャンペーン」は、

紙面の関係上、お休みさせていただきます。



いや、そうしてさせてしまったのは、一体何なのか。何より、こんな映画を「今撮らなければ」と塚本監督に思わせてしまう今の時代状況って、正常なのでしょうか。異常なのでしょうか。

※ 女優の常盤貴子さんが、主演映画の舞台挨拶にもかかわらず「塚本晋也監督

の『野火』という映画を観たんですけど、今、よくぞ撮ってくださいって

という素晴らしい映画。みなさんぜひご覧になってください」と、自分の作品

そっちのけで宣伝されたことが話題になりました。「今、よくぞ」という言葉に

込められているようにも思えたのは、私だけでしょうか。



常盤貴子

仏さまの目とは、私たち人間の煩惱を離れた目、つまり私たちの外側の目だと言えるでしょう。

私たちの先輩方は、「阿弥陀様は、どう思われるだろうか」と、阿弥陀様と相談しながら、

阿弥陀様の目を意識しながら人生を歩まれました。とはいっても人間ですから、誰も仏様の本

当の心はわかりません。しかし、立ち止まり、自分を振り返り、違う角度からものを考えてい

くからこそ、豊かなものの見方が育てられていくのです。

阿弥陀様の別のお名前を「施眼（眼を施す）と言われるのは、そんなはたらきからなのでし

よう。そこに、異常を正常にしている迷いの姿が明らかにされていくのだと教えられるのです。

迷いの中にあることに気づかなければ、道を求

めようとも思いません。異常を正常だと思い込み、

人を傷つけ、自分を貶めてもわからない。

実は、迷いの深さに気づいたときには、既に阿

弥陀様のはたらきの深さに気づいているというこ

ともあるのです。大切に味わいたいものです ■



『野火』2014年  
監督・主演：塚本晋也



## 極楽寺ホームページ

こつこつ更新中

極楽寺.com で、検索して下さい。

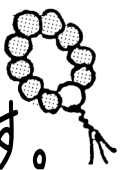


### 極楽寺だよりを送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。  
有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送し  
ます。送り先が増えると、うれしいのです。

お寺まで、お持ち下さい。

お念珠 修理いたします。



□ 案の定広島カーブは失速し、今年もBクラス。まだまだ耐えねばならない時期のようです。思い通りにならない人生と、どう向き合うべきかをカーブに教えてもらっています。□ ラグビー日本代表の大活躍に、大興奮!! 特に、五郎丸選手のキック前のルーティーンが印象に残った方も多いのでは。あれはまさしく儀式・儀礼です。形を整えることで、心を整える。私たちの世代は「形よりも心」と言ってきましたが、形の大切さ、儀礼の重要性を再評価すべきだと考えさせられました。